

AH! OKURIKU

第22号

特集

海外の目から見た北陸



左上：高岡市金屋町

右上：五箇山

左下：雨晴からの立山連邦

右下：砺波市散居村

支部ニュース「AH!」の第22号をお届けいたします。
今回も「海外の目から見た北陸」というテーマで富山支所
のお世話で座談会が行われました。
富山での発見がいきいきと語られています。

海外の目から見た北陸

2002年3月6日高岡短期大学
デザインCグループにて

出席者: クリstoffァー・コビーさん(アメリカ)
高岡短期大学 助教授
ジェフ・セダーバークさん(アメリカ)
国際交流員
若井・エリザベッチさん(ブラジル)
主婦
司会: 玉井 泰子さん
高岡短期大学 助手

玉井: 今回は海外出身の皆さんに北陸、主に富山についてインタビュー形式でお話しをしていただければいいなと思っています。それでははじめに富山に住んだきっかけ、初めて来たときの富山の印象などをお聞かせ下さい。

ベッチ: 私は17年前に研修生として高岡に来ました。そのときに主人と知り合って、嫁に来ました。来た家は土蔵造りの黒い家で、そのときの印象は「こんな家に住みたくないなあ。お化け屋敷みたい」という感じだったのね。大きいじゃない、天井も高いし、住みたくなかった。そうしたら主人が隣に小さい家を作ってくれたんだけどね。

ジェフ: 私はちょうど一年半前に来ました。そのときは英語指導助手として。その一年後、今の国際交流員という仕事に変更しました。

玉井: 印象はどうか?

ジェフ: いいね。最近、北陸が好きになってきました。特に金沢と高岡。富山市みたいな都市でもまあまあ好きだけど、アメリカっていう国は新しい国ですよ。だから、アメリカ人はそういう歴史とか文化に富んでいるのに憧れるかもしれない。特に高岡の歴史的な所とかけっこうありますよね。あれはおもしろいと思います。二上とか古城公園とか瑞龍寺とかいろいろ素敵な場所があるから。

コビー: 私は初め金沢工業大学で英語を教えるために1988年1月、日本に来ました。一番好きなところは五箇山ですね。

日本家屋

玉井: 住宅についてお話ししていきたいと思うんですけども、日本家屋について初めてみた印象や良い所、未だに感じている違和感などをお聞かせ下さい。

ベッチ: 最近の住宅はあまりいい材料を使っていないと

思う。我が家がそうだから。はがれてきたり、カビが生えてきたり、湿気も多くてそういう点はマイナス。だから古いのはいいかもしれない。だけど住み良いとは思わない。夏は涼しいけど、天井は高いし、寒いから。それでも昔の家は畳だったり、木とか材料のせいか湿気をあまり感じさせない。風通しが良くなっていてみたいな感じはする。



囲炉裏がある風景(五箇山)

ジェフ: 高岡の伝統的な町、例えば金屋町とかは住んでみたいと思います。でもマイアパートもすごい大好き。けどアメリカのアパートよりちょっと狭いかな。一般的にアメリカはほとんど大きな暖房はどの部屋にも繋いでいるんだけど、日本はそうじゃない。だから日本の部屋は寒いけど、囲炉裏とかこたつとかいろいろ暖房方法がありますね。

コビー: 囲炉裏がある風景は大好きですね。冬は寒いので秋が一番いいですね。囲炉裏を囲んでいわなの塩焼きなどは最高です。五箇山にはもう10回くらい行ってるんですが、いつも同じ所に泊まります。料理もうまい。山菜とか。

気候風土

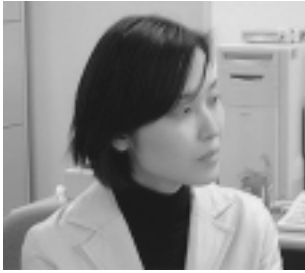
玉井: こちらの気候に関してはいかがですか?

ベッチ: とにかく湿気が多い。でも季節がはっきりしてるのはいいよね。味わえる。毎年ね。そのなかで子供たちが成長していくのはすごくいいし、これからは子供たちといっしょに季節を味わいたい。湿気が多いとか寒いとかを含めて楽しみたい。

玉井: 具体的にはどのようなことですか?

ベッチ: 例えば景色を見るとか、外に出て、春を感じる。季節が変わると小物を替えたり、雛人形を飾ったり。今は子供が大きくなったから、一人で楽しんでいるけど。秋が来たら焚き火をして、冬はスキーできないので、景色を楽しんだり絵を描いたりしたいと思っています。

ジェフ: どの季節でも良さがあると思うんだけど、短所もある。冬は極めて極めて寒くなるじゃないですか。でもスキーもできるし、露天風呂もあるし、そういうのすごくいいと思う。でも夏はとても蒸し暑いですね。私が中学校で働いていたときは職員室にクーラーがなくて、あんまり暑くて絶望感を感じた。シャツの下には汗の粒を感じるくらい。毎日二回シャワー浴びてた。秋の紅葉もとてもきれいだと思うけど、一年を通して雨がたくさん降りますね。天気予報見ていつも東京・大阪は晴れ晴れ晴れ、でも富山は傘傘傘、今日もちょっと降りそ



高岡短期大学 助手
玉井 泰子さん



主婦
若井・エリザ・ベッチさん



国際交流員
ジェフ・セダーバーグさん



高岡短期大学
クリストファー・コピーさん

うになってきた。でもしょうがない。我慢します。
ベッチ:それはおいしい水ができるためよ。
ジェフ:それはプラス思考ですね。
ベッチ:雨が降るとご飯もおいしくなるし、いいよ。
ジェフ:ホント雨ありがとう。でも日常生活は大変になります。自転車の人も大変。だから万葉線に乗ることもある。
コピー:富山は私の出身オハイオ州のクリーブランドという所によく似ている天気なんです、違うところは雪が降ってくると道路から水が出てくるんですね。もしクリーブランドでそういうことをやったらすぐ凍ってしまう。
玉井:夏の暑さはどうですか。気分転換の方法とかありますか？
コピー:ずっと冷房の下にいる。外に出ない。(笑)
ベッチ:女性は喜ぶのね。湿気が多いということは汗をかくじゃない。そうすると肌がかさかさにならなくていいの。日本人、特に富山の人には老けない。私は兄弟と比べると皮膚がぜんぜん違う。
玉井:それは気がつきませんでした。
ベッチ:ブラジルはずっと暑いから反射してくる光も日焼けになってしまう。日焼けがすごいのでしみ・しわにもなるし、皮膚が厚くなるんですよ。ここは肌がつつるすべすべになる。湿気は悪いことばかりではないなあと思う。最近ね。

祭り

玉井:住んでおられて実際廻りのお祭りとか近所づきあいとかあると思いますが、どうですか？
ベッチ:近所とのつきあいがあってお祭りに参加しているだけであって、それを信じているわけではない。できれば参加したくないわね。
玉井:祭りをご覧になったりしたことはありますか？
コピー:音だけ遠くで聞いたことがある。
ジェフ:私は参加してます。例えば去年は新湊の曳き山祭りというのがあって、私は連休を取って、一日中その夜までずっとハッピーで御車山を押していた。あと祭りじゃないけど高岡で文化的な行事とかイベントがありますね。越中万葉夢幻譚には2回出ました。そういうイベントがあるたびに参加したくなります。いつも友達

のグループで「行こうぜ」ってね。
玉井:そういう意味じゃ、アメリカの祭りにも参加されていたのですか？
ジェフ:私はいつも一番盛り上がっているところが好きだからよく参加してましたね。私の故郷はポップコーンがとても有名で、9月に入るとポップコーン祭りがある。道路をポップコーンでできた車がパレードする。みんなに散らしながらね。
玉井:ベッチさんはブラジルの時どうでした？
ベッチ:カーニバル。パレードでみんな踊っているよ。そのためにみんな生きている。そのために働いて衣装作ってそれに合わせているみたい。この日に出ないと死んじゃうみたいだね。(笑)



曳き山祭り(高岡市)

高岡の町

玉井:今度は町について話をお聞きしたいんですけど、富山県の町に関して何か印象とかありますか？
ジェフ:高岡は好きになってきました。ここへ来て以来いろんな友達ができ、いつも親切にしてくれるし、高岡はすごく住みやすいと思う。この間初めて瑞龍寺に一日勉強に行って来ました。いろいろ学んで感動しました。すばらしいところだ。あとは、今おとぎの森公園の近くに住んでるんですけど、そこはとてもきれいで、川はきれいだし、そこから山もけっこう見れるし。この間富山城に行きましたけど、けっこう新しいですね。城といたら昔のイメージがするんだけど、実際はそんな



国宝瑞龍寺(高岡市)

に古くはないから、やっぱり高岡とか金沢とか古い町が私は好きですね。

玉井:じゃあ自転車に乗っているんなところにいかれるんですか?

ジェフ:二上はよく行きますね。夏に自転車でふらーっと二上山へ行って、散歩とかハイキングしたりして。一番上のところへ行くとすごい景色で、立山連邦も見えますね。

ベッチ:高岡は道が車中心でできていて私たちは歩くところがないと思う。もうちょっと私たちのこと考えて欲しいな。雪が降ると、歩いていて車に雪とか水とか掛けられたりして「最悪の日だ。」とかいっていたのを思い出したりします。それに高岡の町、特に古い建物は市から大事されているんだけど、ブラジルだったら車を通れなくする。保護するために。高岡はまだそういうことをしないのかなあって思うんだよね。それ守るのは市民でしょ。車を通れなくするのが当然かなと。その道だけでもね。

コピー:五箇山みたいに世界遺産にでもなれば保護できるだろうけどね。

富山再発見

玉井:最後に自分の好きな場所だとか特に富山県のどこが好きだとかありますか?

ベッチ:立山はすごい自然がいっぱいあって、見たことのない植物もいっぱいあって、そこで植物を描くのは憧れる。

ジェフ:うん。富山県は自然が一番いいですね。

ベッチ:親戚が住んでいる上市に大岩山というお寺があって、建物の中にある彫ってある石もすごいんだけど、そこから湧いている水はとてもおいしい。毎年夏に行くとしそめんじゃないけど、うまいしそめんがあるの。山からの水が冷たいからしそめんが冷やっとしておいしい。

ジェフ:私は砺波市が好きです。最近行ったんだけど、高岡市に近いのに感覚がちょっと違って、いいお店や建物がたくさんある。二回しか行ったことはないけどいい印象だった。

ベッチ:あそこは春になるとチューリップ畑がすごいきれい。チューリップフェアとは違うんですよ。チューリップフェアはお祭りみたいな感じで、畑を見る方が

すごいきれいでね。なんか気持ちがいいじゃない。真っ赤や真っ黄色のじゅうたんが敷いてあるみたいで、ドライブすると気持ちがいいよね。砺波に行くと高い建物とかがなく、広く感じるじゃない。

ジェフ:うん。高岡とは違う。

ベッチ:高岡は狭くてくっついてる。

玉井:城下町と散居村の違いですね。

ベッチ:砺波の方が気持ちとしては楽だね。隣近所に気を遣うこともないし。

玉井:他に例えば海外から、日本人でもいいですけど、お友達が来られたときに、どういうところを紹介したいですか?

コピー:私はやっぱり五箇山ですね。ただそこまでの道が危ないですね。でもすごく景色がきれいです。

ベッチ:私は我が家に招待します。「うちおいだよ。」って言って。日本人だったら感心するけど、ブラジル人は「なんだろう、別に」みたいな。やっぱり価値観が違うからね。もし一億円があったら、私ならあの家を買うより、やっぱり最近の快適な一億円の方がいいなあと思う。暖かいうちで広くて自分の趣味をいっぱい入れてっていうほうに一億円を掛けたいな。(笑)それで今の家は趣味の合う人にあげたい。

ジェフ:私はそんな家に住んでみたいですね。育ったときはいつも古い家に住んでたから。古い建物は生き物みたいな感じがする。でも最近できたやつはそんな感じがしない。私は古いほどいいと思う。

ベッチ:雷落ちたらね、窓全部ガンガンガンガンンンンするよ。そういっても手放せない家になっちゃったから、もうずっと一生だな。それとうまくつきあっていくのにどうしたらいいのかな。と今一生懸命考えているところ。リフォームしようとか、リフォームしたらその価値がなくなるから、大事にしようと考えたりはしているんだけど。それで仕方なくおつきあいしよう。



チューリップフェア(砺波市)

最後に

富山での生活が長い方も、短い方もそれなりに富山になじんでいるところがおもしろいですね。海外出身の皆さん、それぞれの国との違いは大きいかもしれませんが、もっと北陸を楽しんでください。

男子の値打ち

『男子厨房に入らず』とは、昔からの言い慣わしであるが、昨今流行の『男の手料理』『男の野趣料理』などが持て囃されるにしたがい、事情が少し違うようである。

絵に成る家族の居場所とは、親父、座敷。お袋、台所。婆さん、仏間。兄ちゃん、姉ちゃん、影無し。と決まっていたものである。なのに親父が厨房でエプロン姿とは情け無い。

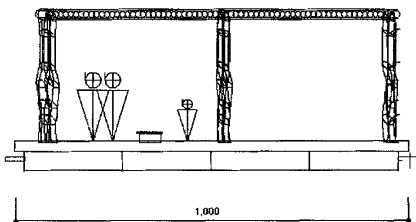
そもそも一家の主人たるもの、家の中心に座るものとされてきたのだ。床の間の前でデンと構えているものである。主人の事を『大黒柱』と云うが、昨今の住宅は大黒柱と言えるはっきりした中心柱が無い。数本の柱で力を分散する構造が、現状の家族構成を象徴しているようである。

床の間を背に座ると、折角掛けた山水画が見えない。床飾りが、違い棚が、銘木の床柱が見えない。主が床を背にして座るとすれば、来訪者に威厳を示すための舞台装置なのだ。でも目上の人があると席が変わるものだが。

厨房については昔から見ると、随分中心に来たものだ。日当たりも良い場所にきたと云う事は、それだけ主婦の座が高くなったのか。食卓ではテレビが一番良く見える場所が主座なのだが、お父さんは座らせてもらえそうもない。

「お料理にうるさく言うんなら、厨房から出て行ってよ」厨房に入れてくれないなら、閨房にも入らねいぞ、チャンチャン。チトお下劣でした。男たるもの、居場所によって値が違います。世のお父様方、負けずに夫の座を確保しましょう。

森田建設株式会社 代表取締役 森田 計一



最小単位数による浮島の断面図

野を楽しむ『暮らしの風景』



日本は、高度経済成長期において膨大な需要に追いつくための大量生産を繰り返した結果、物的にはある程度の成果を得られたものの、画一的な景観の都市が多くなってしまいました。

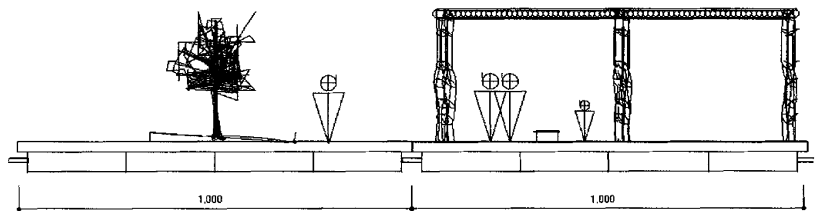
地方都市であっても、手が届くところに豊かで美しい自然があるという優位性に目もくれず、大都市のもつ魅力、機能性を追い求めたかのような都市整備がなされつつある現状です。

都市計画論になると長くなるので、ここでは、私が住む福井のような地方都市の魅力についてふれて見たいと思います。地方都市の魅力は、素敵な自然が残っているということにあると思います。野草が生える河川や、雑木が茂る里山といったものが、都会に比べて生活や都市活動の場から近いのです。

このような自然環境を計画的に保全、維持していくことも大切ですが、都市住民が自然とどう関わって生きているかが垣間見えると、豊かな都市生活風景となって映ります。例えば、近くに菜の花が咲き乱れる川の風景があるとします。これを見ながら街に入ると、家の軒先や玄関にも同じ花が器に入れて飾られていて、この花がどこから来たのか一目瞭然なわけです。都市住民が野遊びをしているなんて上品な街でしょう。

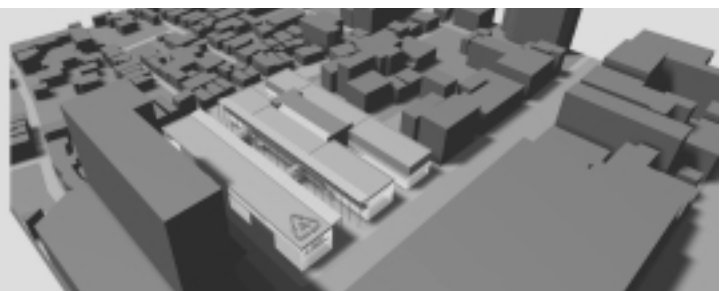
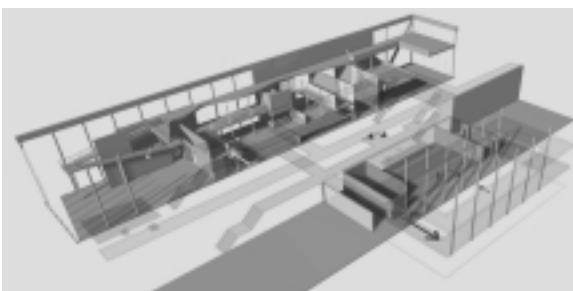
街なかで野を楽しむ価値観は多様な分野に活かされます。ランドスケープはもちろん、都市計画、建築、土木・・・と、これらが有機的にコラボレーションしていくためのキーワードとして都市づくりを進めれば、循環型の都市が自然に構築され、地域の特色ある街の表情が、肩肘張らずに出来上がってくるのではないのでしょうか。縦長の日本には様々な『野』があるのです。

風景工房 藤澤 芳一

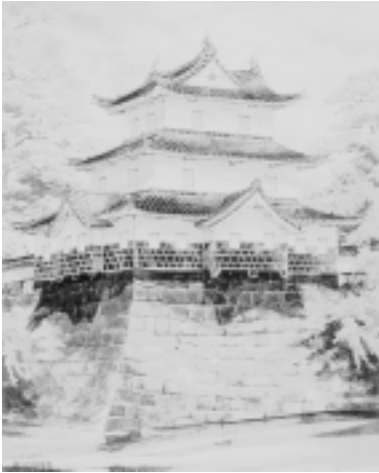


浮島が結合されている状態

新潟「水の都」の復活 齊藤 寛之(新潟工科大学)



新発田城三階櫓・辰巳櫓の復元について



「新発田城三階櫓復元予想図」

新発田市は新潟県北部に位置する人口8万の溝口氏10万石の城下町である。新発田城本丸跡には石垣と堀が残り、表門と旧二ノ丸隅櫓は国の重要文化財に指定されており、石垣の切込接布積の技術はたいへんに優れたものであると評価されている。

明治初期の新発田城には本丸、二ノ丸、三ノ丸とあわせて櫓が11棟、主な門が5棟あったが、新政府の城郭破却令で、前記の門と櫓を残して取り壊されてしまった。四季を通じて、多くの市民に親しまれている新発田城は、菖蒲あやめ城、舟形城や狐尾曳ノ城、きつねのおびきじょう、笊と愛称と呼ばれ、市民の心のよりどころであり、その復元を切望する声が大きくなってきた。

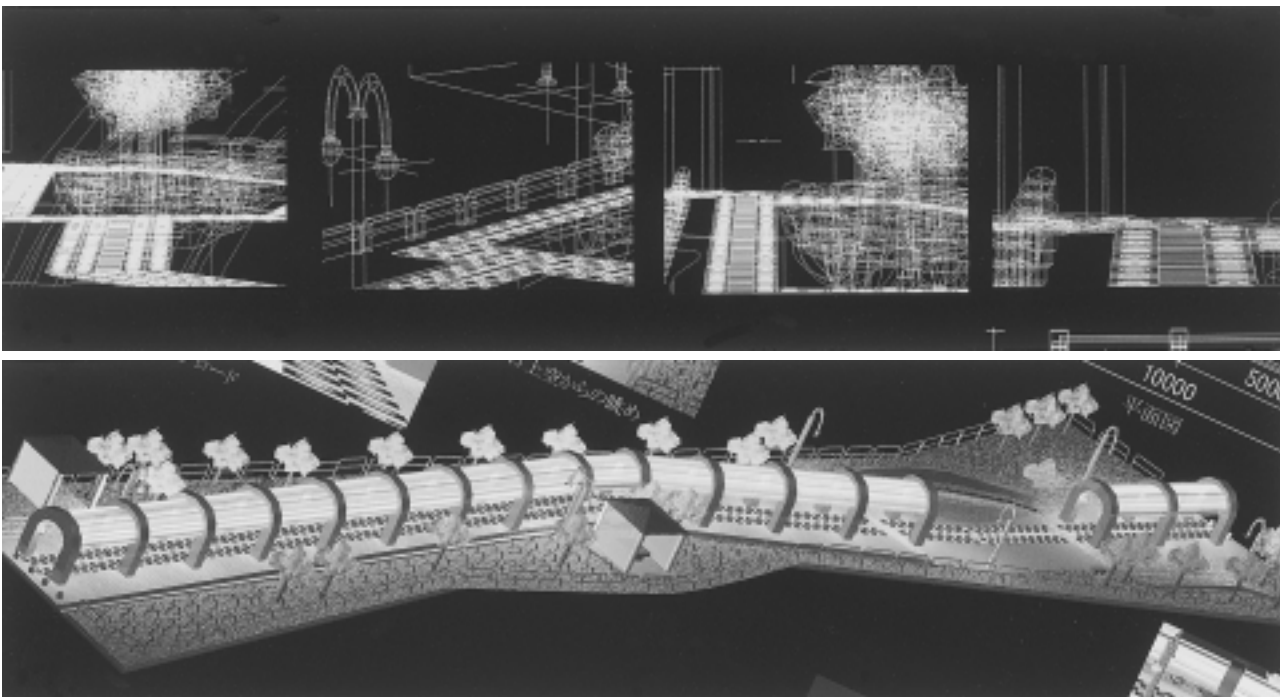
市は平成11年度から地域文化財・歴史的遺産活用事業として調査・実施設計に取り組み、14・15年度に総額12億円で本丸の三階櫓・辰巳櫓を史実に基づき、木造・本瓦葺き・漆喰による伝統工法によって忠実に復元し、併せて石垣の補強を実施することを決定した。

天守閣の役目を果たしていた三階櫓の棟は丁字型で3つの入母屋からなり、それぞれに鯨を上げるという他に類例を見ないものであったし、また辰巳櫓の火災は、当市の誇りである赤穂義士堀部安兵衛の命運を決めたとさえいわれている。

市文化財調査審議会は平成13年7月18日に、市民が参加して復元事業にあたること、伝統工法による復元とすること、石垣に負担をかけない現実的な工法を検討することなどを市教育委員会に建議を行なった。7月24日に、新発田市自治会連合会、新発田城三階櫓再建期成同盟、寺町・清水谷まちづくり協議会、新発田城を愛す会、新発田歴史塾「道学堂」の5団体が結集し、「新発田城三階櫓・辰巳櫓の復元を推進する会」が設立され、同11月1日から署名活動を開始して、3万余名の署名を片山吉忠新発田市長に提出した。

当市のまちづくり理念である「共創」は、「愛せるまち 誇れるまち ふるさと新発田の創造」のために、市民と行政との協力によって、共に創り上げるということである。近日中に市民総参加の城づくりを目指して(仮)新発田城復元の会」が設立される見通しである。

新発田市教育委員会 鈴木 秋彦



材料のL L Cについて

近年、建物の着工から廃棄までに直接かかる建設費、修繕費の他に運営管理費、保全費、水道光熱費等のライフサイクルにわたって積み重なっていくコスト(LCC=ライフサイクルコスト)をいかに削減するかが重視されている。持続的な産業の発展を可能とするためには、建築物が実際に廃棄された以後の材料についても、循環型を考慮に入れた整備が必要である。

1991年10月に施工された再生資源利用活用法において、建設業では、土砂、再生コンクリートの利用率の向上および利用計画の策定が義務づけられている。一般的にコンクリートは、再生路盤材等となり道路の路盤などで利用されている。これは、従来廃棄物であったコンクリート殻を細かく砕いただけのもので、化学組成は何も変化していない。路盤などに再使用する場合は多量のアルカリが溶出し、動植物が受け入れられる許容量を超えた土壌や地下水を作ることになる可能性がある。

一方、鉄骨材料では、資源の再利用・再生が既に行われており、建築で用いられる鋼材ではJIS規格の整備をはじめ、鋼材メーカーの開発により、建築施工に適した安定した品質の供給がなされている。しかし、鋼材の再生利用として注目されている電炉鋼等はまだまだ重要な箇所の材料としては使われていないのが現状である。

構造材料の再生資源利用には、製造およびリサイクル、省エネルギー等を考慮し、環境に与える影響を総合的に判断する必要がある。構造材料のLCCおよび環境に与える影響については、(1)製造時のコストおよびエネルギー(資源を含む)、(2)リサイクルによる資源再生率・構造物の耐用年数および解体、(3)再資源化におけるコストの面を考慮する必要がある。

今後20年、30年といった中長期的な視点で無駄のない適切な補修を行うとともに、エネルギー価格の変動や新技術・新材料の登場に合わせて、省エネルギー化していくことが重要となってくるであろう。

信州大学工学部社会開発工学科 助手 市川祐一

仕口・継手データベースを作成して



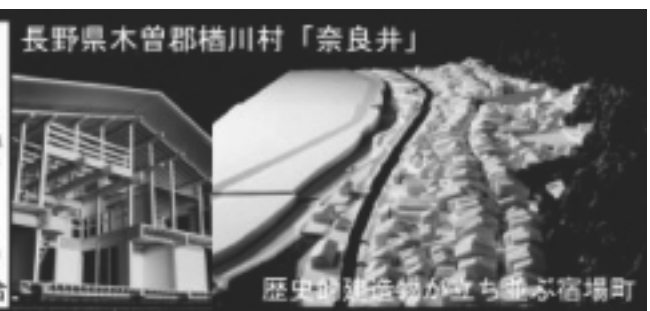
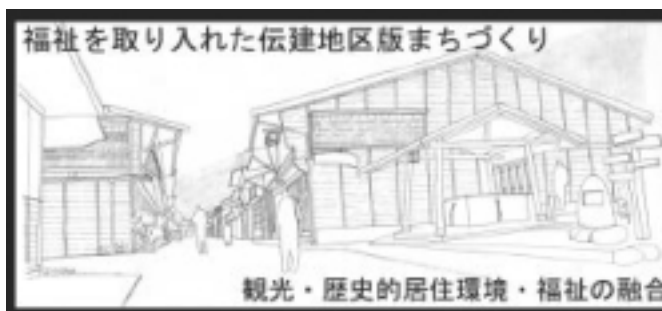
平成13年7月に復元工事が完了した金沢城址公園内の菱櫓および五十間長屋、橋爪門続櫓等は、明治以降に建てられた木造城郭建築物としては全国最大規模です。これらの建物は、戦の際に二ノ丸を守るための施設で、菱櫓は大手と搦手を見張る物見櫓、橋爪門続櫓は二ノ丸大手の橋爪門枅形を見張る物見櫓、五十間長屋は武器等の倉庫としての役割を果たしていたようです。

筆者の所属する大学では、工事に参加された職人さんの代表者で結成された「石川の伝統的建造技術を伝える会」の委託を受け、五十間長屋と菱櫓の2棟における仕口・継手技術の記録整理事業を行ってまいりました。2棟で用いられた全ての仕口・継手技術について、立体的で分かりやすい資料を残すことを目標に作業を進めてまいりましたが、つい先日、ようやくその作業が終わりました(ホッと一息)。作業を開始した時は膨大な図面(仕口・継手詳細図)の量と仕口・継手パターンの多様さに圧倒されるばかりでしたが、職人さん達に話を聞いたり、学生と一緒に資料を調べたり、ああでもないこうでもない議論したりしている内に徐々に全体像が見えるようになってまいりました。

工事で使用された接合部の仕口・継手詳細は217種類(原理上の種類は40数種類と言われています)で、その内107種類の接合部の3次元CADモデルを作成しました(基本型を含めるともっとあります)。今考えれば、立体のCADモデルを作成して初めて、仕口・継手の複雑さや面白さ、仕組みが徐々に分かってきたように思います。また、一人の学生が大量の写真画像や3次元CADモデルを管理するためのデータベース検索システムを作ってくれました。3次元CADモデルを作成したり、データベースを構築したりする作業は対象物の構造をよく理解していないとできませんし、逆にそれらの作業を通して発見できることが非常に多いことを改めて感じました。

新しい表現媒体はそれまでと異なる建築の側面を映し出してくれます。逆に、建築やその内部に秘められた原理に対する興味が新しい表現媒体を次なる姿へと進化させる。そんなことを考えさせられた意義深い作業でした。

金沢工業大学 下川雄一





妙泰寺本堂

奈良の寺院建築を見慣れた筆者には、一見すると寺院本堂とは思えないような建築がある。妙泰寺本堂である。

妙泰寺本堂は切妻造・平入で、正面に唐破風の形をとった向拝をもうける。切妻の屋根は、現在はトタン葺であるが、瓦を葺くには勾配が緩すぎ、かつては板葺もしくは柿葺であったと考えられる。もし、正面の向拝がなければ、寺院本堂とは気付かずとおりすぎてしまうかもしれない。しかし、妙泰寺は臨済宗の寺院で、この建築はれっきとした寺院本堂なのである。

内部に入ると、正面一間通りの広縁があり、その奥には中央に奥行の深い内陣がおかれ、その左右に正面向かって右側に上の間、上奥の間、左側に下の間、下奥の間が並び、臨済宗本堂に一般にみられる平面形式、正規の臨済宗本堂ともいえる平面形式をとっていることがわかる。現在の本堂は、18世紀の後半に建立されたものとみられる。

金沢には、切妻造の本堂が数多くあり、妙泰寺のように比較的小規模で、平入の比較的簡素なファサードをもつ本堂から、寺町の高岸寺などのように妻入で、大きな妻面に海老虹梁・暮股・絵様肘木などをもちいて意匠を凝らした本堂まである。近世本堂は「入母屋造、大きく高い本瓦葺の屋根」という、筆者がこれまで漠全と抱いていたイメージは、金沢の寺院建築をみていくなかで崩れていった。

これらのなかでも比較的小規模な切妻造の本堂には、後世に屋根勾配をあげ、瓦葺に替えたことが確認できるものがいくつも残っている。妙泰寺のようにかつて板葺あるいは柿葺であった寺院本堂は、卯建山以外にも街中で広くみられた形式だったのではなからうか。金沢のかつての町並みは、周知のように町家の板葺・石置きの屋根が軒を連ねるものであったが、このような寺院本堂の例をみていくと、町家のみならず、寺院にまで板葺の建築があり、それらが一体となった金沢の独特な町並みが想像されよう。

数多くの寺院建築の残る金沢で、妙泰寺のように切妻造の小規模で簡素な本堂は、それ自体が強く主張してくるものではない。しかし、こうした建築も、忘れられかけた金沢のかつての姿を伝える重要な遺構なのであり、こうした建築の保存も強く望まれるところである。



妙泰寺山門

金沢工業大学 富島 義幸

新潟市は近世は長岡藩領(のち天領)の湊町として栄えましたが、明治以後は県庁がおかれたこともあり、かなりの近代建築の集積がありました。しかし度重なる大火、地震、それに戦後の経済成長期の建て替え、再開発で大半が失われました。

「新潟下町の歴史的景観を愛する会(以下「下景」)は、下町(しもまち)と言われる、旧市街の信濃川河口に近い地区にのこる近代建築、第四銀行住吉町支店(昭和2年)の現地保存の運動を母体に1999年6月に発足しました。同地区に大きい幹線道路を通す計画にともなう道路拡幅で取り壊されることになっていましたが、国、市、市議会などへの陳情、シンポジウム開催など行う間に、新潟市は新設の郷土歴史博物館敷地に同支店を、可能なオリジナル部材を用いた再現を行うことを決定し、今年度中に解体工事が始まる予定です。

この下町は旧市街の中でも、大火の被害を受けず、再開発も行われてこなかった地域です。江戸時代以来のままの道筋(路地が異様なほど多い)に町屋や棟割り長屋が数多く残っています。この町屋に近年関心があつまりはじめました。大正期の町屋を、復元的に改装した画廊「新潟絵屋」が2000年六月にオープンし、人を集めています。

上記の道路拡幅の地区にも多くの町屋があり(絵屋の建物もその一つ)、そのうちの2棟を、昨年新潟大学工学部のグループが詳細な調査を行いました。1棟は直後に取り壊されましたが、もう1棟の明治期の建築と推定される旧小川家は、市内の専門学校が移築して、学校施設に転用したいと所有者に申し出て、取り壊しが延期されました。二月にはその町屋で舞踏公演と、「下景」主催の一般公開が行われ、二日間で約300人の市民が訪れました。その後資金難で移築計画難航の知らせが伝わったため、移築の支援活動を行おうと有志があつまり、この4月に「新潟の町屋を生かす会」を新たに結成、募金活動をはじめました。

同会では、今後は下景や他のまちづくりグループとも連携して、下町や市内の他地域にのこる町屋への関心を高め、保存や活用のための手法などの提言を行っていきいたい考えです。

新潟の町屋を生かす会

事務局 〒950-2064 新潟市寺尾西2-9-29

tel&fax 025-260-4342(大倉)

e-mail ookura@rapid.ocn.ne.jp

大倉 宏(美術評論家/新潟下町の歴史的景観を愛する会)

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第22号

発行日 2002年5月17日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

伊藤 晋栄(新潟) 山下美紗子(富山)

西山マルセ-ロ(長野) 宮下 智裕(石川)

野嶋 慎二(福井) 菊地 吉信(福井)

事務局 白土 考・瀬口さゆり

〒920-0863 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F

TEL&FAX 076-220-5566